



TITLE:

# 十九世紀ウイグル歴史文獻序説

AUTHOR(S):

濱田, 正美

---

CITATION:

濱田, 正美. 十九世紀ウイグル歴史文獻序説. 東方學報 1983, 55: 353-401

ISSUE DATE:

1983-03-15

URL:

<https://doi.org/10.14989/66620>

RIGHT:

## 十九世紀ウイグル歴史文獻序説

濱 田 正 美

一八六四年のムスリム反亂の勃發から、ヤークーブ・ベグ政權の成立と崩壊とを経て、一八八四年の省制施行に至る前後およそ二十年間は、新疆（東トルキスタン）の歴史上とりわけ重大な意味を持つ時期であったと言える。その理由は先ず第一に、この地域がこの時期において、ヨーロッパ植民地主義と初めて本格的に遭遇したことである。スナイダー銃とマンチエスターの産物は、ほぼ時を同じくしてユーラシア大陸の東端の島嶼部と最奥の内陸部に到達し、ここにウォーラー・ステイン氏の言う近代世界システムは、舊世界のあらゆる地域をその内に包攝するに至ったのであった。程度の差こそあれ東トルキスタンも亦、すべての非ヨーロッパ世界に共通の歴史的命題——外部から押寄せる「近代」と傳統的社會構造及び價值觀との對峙——に直面することを餘儀なくされたのであった。この時期を重視すべき第二の理由は、多民族國家中國の一自治區としての現在の新疆の存在形態が直接的にこの時期に由來するという事實である。即ち、この時期の諸事件の結果として中央アジアの國境が確定され、新疆は従前の外藩ではなく、内地同様中國の一省とされた。この地理的政治的枠組は現在に至るまで不變である。そして理由の第三は、前二者とは聊か趣きを異にするが、この時期に先立つ時代にあつては自らの歴史を語ることが極めて稀であつたこの地域のトルコ系住民が、突如として相當の量の記録を遺したということである。これらの記録は、めまぐるしく繼起した諸々の事件の經緯のみならず、圖らずも——むしろ當然にも——と言ふべきか——從來殆ど知られていなかった傳統的社會のむしろステイステイックな様相や、時にはそこにおける精

神生活の一端をも我々の前に明らかにする。

しかしながらこの時期に關する從來の研究は必ずしも十分であるとはいひ難い。即ち、我國の學界にあっては研究それ自體が極めて少ない<sup>①</sup>。歐米における研究は、量的にも甚だ僅少である上に、その關心を主として英・露・清三帝國間のパワー・ポリティックスの問題に集中させており、東トルキスタン自體への關心は甚だ稀薄である<sup>②</sup>。中國とソ連における研究は最近頓に盛んである。これらの研究はトルコ語史料を利用しているという共通の特色を持つが、その主張には大きな懸絶がある。例えば、中國側の専門家によれば、一八六四年の反亂は農民反亂であり、ヤークーブ・ベグは不法な侵入者であり、左宗棠が新疆を收復したのは正義の鬭争である<sup>③</sup>。これに對し、ソ連の専門家の主張は、一八六四年の反亂は民族解放鬭争であり、ヤークーブ・ベグの政權はウイグル族の政權であり、清朝の再征服は植民地反亂に對する懲罰行動である<sup>④</sup>と云うにある。雙方の主張の隔たりは、現在の時點における中ソ對立の一反映としても興味深いものであるが、ともにその國家的政治的立場故のバイアスから自由であるとはいひ難い。それ故、この時期の歴史的經緯をより明確にし、諸々の事件を透して窺える東トルキスタンのイスラーム社會の様相を解明することは、依然として我々の課題であると言わねばならない。筆者はこの課題に關連する幾篇かの論考の發表を今後に計畫しているが、その爲には先ずひとつの基礎作業が必要であると考え。その作業とは、この地域の住民自らの手になる文獻のうち、現在までに筆者が目睹し得たものの紹介・解題を行なつて、これらの文獻の性格を明らかにしておくことである。本論に先立って、本稿の表題にも含まれてゐる「ウイグル」という名稱の問題と東トルキスタンのトルコ語文獻總體の問題とを一瞥しておきたい。

東トルキスタンの住民は、この地域を「モグーリスターンの國土とカーシュガルの大地」(Mogūliyya kišvar va Kašgar zamin) とか、<sup>⑤</sup>「モグーリスターンと六城(もしくは七城)」(Mogūlistān va Altā (yetā) Šahr) などと稱してゐたが、自分たち自身に對してはイェルリク (Yerlik 土地の者) という以外に、固有でかつ東トルキスタンに共通の民族名

稱は持たなかった。必要があれば、出身のオアシス名によりカーシユガル人 *Kasgarliq*、トゥルファン人 *Turfanlıq* などと稱していたのである。<sup>⑦</sup> 現在用いられているウイグルという民族名稱は、一九二一年タシュケントで開催された會議に際し、當時ソ連領に居住していた東トルキスタン出身者の代表によって古代のトルコ・ウイグル族に因んで採用されたものであり、新疆側では、盛世才治下の一九三五年頃から一般に使用されるようになったと言われている。<sup>⑧</sup> 従って、十九世紀のウイグル社會などという表現は、それ自體既にアナクロニズムを犯していることになり、例えばフレッチャー氏などは、*Turki-speaking people* という用語を用い、ウイグルという名稱の使用を避けている。しかし、いかに正確であろうとも「トルコ語東部方言を話していた東トルキスタンの住民」という表現を繰り返すのも甚だ厄介なことである。それ故、「十六世紀後期から十七世紀にかけて、コムルからカシユガルにいたる東トルキスタンにトルコ・イスラム社會が形成され」、「この地方に言語・宗教・慣習・社會經濟生活をほぼ共通とする」民族が形成されていたという前提（それ自體更なる検討と確認を必要としているが）に立つて、本稿でも便宜上、この民族に對するウイグルという名稱を、歴史的に溯つて使用することにした。

言語に關しても同様の事情がある。現在、ソ連と中國及び我國の若干の専門家は、東トルキスタンのオアシス住民のトルコ語に對し、ウイグル語という名稱を時代的にほぼ無限定に使用している。しかし過去において固有の民族名稱を持たなかったこの民族は、自らの言語をも單に「トルコ語」*turki*と呼び慣わしていた。そして、少くとも書寫語に關する限りでは、この「トルコ語」とはチャガタイ語のことに外ならなかった。

チャガタイ語は西方のオスマン語とともに、イスラームを受容した後のトルコ族が自らに獲得した眞に古典語と呼ぶに相應らしい言語である。系統的にはカラハン朝トルコ語とホラズム・トルコ語を繼ぎ、ティムール朝の下で詩人ナヴァーイーの天才により一舉に完成と洗練の域に到達したこの言語は、文獻の總量ではオスマン語に及ばぬにしても、東は東ト

ルキスタン、西はクリミア、北はウラル、南はムガル朝インドという廣大な地域で使用されていた。西方トルコ世界、オスマン帝國にあつてもチャガタイ文學が愛好され、大きな影響を与えたことは周知の通りである。東トルキスタンでは十六世紀からその使用が確認されるが、文化的言語としては當時はなおペルシャ語が優位に立っていた。しかし「十七世紀には、カシュガリアとフェルガーナの諸都市では、公用語・文化的用語としてペルシャ語よりチャガタイ語が多く用いられ」るようになり、その使用は今世紀の二十年代にまで及んだのである。この三世紀を越える期間における東トルキスタンのチャガタイ語の時代的變化と地域的分化は更に研究を要する問題であり、事實カイダーロフ氏などは「十七世紀以來文語ウイグル語は獨自の發展の道を歩んだ」と主張している。しかし現在までに筆者が得た印象では、時代的な變化や地域的差異を跡づけることはむしろ困難であり、各々の文獻の著者や寫本のコピストの個人的な差異の方が大きいように見うけられる。つまり、著者もしくはコピストの教養レベルが高ければ高い程、チャガタイ語の古典語としての規範に忠實であり、逆の場合には、フォノロジー（オーソグラフィー）、モルフォロジー、シンタックスそれぞれの面で、より口語に（従つて現代ウイグル書寫語に）近い様相を示すことになる。従つて各々の寫本について、その言語がどの程度古典語の規範に忠實であり、又どの程度方言的要素を反映しているかを明らかにする作業が必要となる。しかし事實の問題としては、或るチャガタイ語の寫本が中央アジアのどの地域で書かれたものであるかを、その寫本の示す言語的特徴からのみ決定することは容易なことではない。レニングラードの『アジア諸民族研究所藏ウイグル寫本解題目錄』の編者ムギーノフ氏が、「ウイグル」という用語は、ここでは寫本が由來した地域を示すものとして假りに用いられている」と述べて、要するに東トルキスタンで收集された寫本であるからウイグル寫本と呼ぶという、極めて非言語的な定義しか下し得なかつた所以である。このように言語に關しても、現在一般に用いられているウイグル、という名稱は甚だ嚴密性を缺いたものであると言わざるを得ない。それ故本稿では、(一)ここに言うウイグル語とは、東トルキスタンで用いられていた、時には方

言的要素をも交えたチャガタイ語のことであつて、古代及び現代ウイグル語とは別の概念である。(二)右の意味でのウイグル語によって書かれた文獻をウイグル文獻と言う、という二項目の定義を下した上で、ウイグルの名稱を用いることにしたい。

さて右の如くに定義したウイグル文獻であるが、これに關する研究は總體としてのトルコ文獻學の中でも最も未開拓の分野に屬しており、現在の段階ではこれらの文獻が全體としてどれ程の規模を有するものであるかさえ十分には明らかにされていない。筆者が知る限りでの寫本の収集と所在に關する情報の大凡は以下の通りである。

先ず中國では、新疆解放以後組織的な文獻の収集が行なわれた。ユースプベク・ムフリソフ氏<sup>①</sup>によって編まれウルムチにおいて刊行された新疆省博物館所藏の寫本目錄に對するユーディン氏の書評によると、ムフリソフ氏は一九五二年から収集を開始し、五四年にはカーシユガル、五五―五六年にはウルムチ、クルジャ、コムル、五七年にはより大規模にカーシユガル、イエング・ヒサル、ヤールカンドで収集にあたり總計二百點の文獻を得たという<sup>②</sup>。ところがカイダーロフ氏が引用している一九五七年二月二日付けの『シンジャン・ゲズイティ』紙によれば、文獻の總數は二千となつており、恐らくはいずれかが誤植であらうと思われる。最近發表された程溯洛氏の論文によると、一九五六年十月から翌年一月の間に、全國人民代表大會民族委員會から派遣された民族調査組が、ウルムチとホタンで檔案文書の収集を行い、ウルムチだけで檔案千四百捆、書籍は八一八冊を集めた<sup>③</sup>というが、この収集は前述のムフリソフ氏の収集とは別のものかと思われる。又一九六〇年には、「新疆少數民族社會歷史調査組」によるチャガタイ語資料の収集が行われ、現在は社會科學院民族研究所に所藏されているとのことである。中國に存在するウイグル文獻に關する情報はほほ以上に盡きる。中國における今後の研究の進展が待ち望まれる所以である。

レニングラードのソ連邦科學アカデミー・東洋學研究所のコレクションは、前世紀末から今世紀初頭にかけて、當時カ

ーシユガル領事であつたペトロフスキー、彼の下僚のリュトシユ、インド佛教學者オリデンブルグ、トルコ學者マールーフ、ラドロフ等の手で収集されたもので、斷片も含めると現在およそ千點のドキュメントから構成されているという。<sup>21</sup>但し、前述のムギーノフ氏編の寫本解題目錄に收められているのは、このうちの三五九點である。又本稿の主題である歴史文獻は、ドミトリエヴァ、ムギーノフ、ムラートフ三氏の編集にかかる『アジア諸民族研究所藏トルコ寫本解題目錄・歴史篇』にも記載されている。ソ連ではレニングラード以外に、タシケントのウズベク共和國科學アカデミーに相當數のコレクションが存在することが知られている。<sup>22</sup>

西ヨーロッパではドイツのハルトマンのコレクションが最も規模が大きく有名でもあつた。<sup>23</sup>しかし残念なことに第二次大戦以降その所在に關する情報は皆無であり、或いはライプツィヒの空襲に際して失われてしまったのではないかと懸念される。

西ヨーロッパに現存する最もまとまつたコレクションは、フランス學士院のそれである。これは、一八九〇年代の前半にグルナールにより主としてホタンで収集されたコレクションで五八點の寫本が含まれている。その多くは聖者傳の類いであるが、十九世紀の歴史に關する作品も若干含まれている。又七點のアスナーフ・ナーメ *asna't-nama* は、東トルキスタンにおけるイスラーム同業組合（アスナーフ）の存在を證明するものとして特に注意を引く。フランスではこの外、ビリオテーク・ナシイオナルにも若干のウイグル文獻が所藏されており、ペリオの漢籍コレクションにも『タリーヒ・アムニーヤ』と『御製勸善要言』のウイグル語譯が含まれている。

ロンドンには、インディア・オフィス圖書館と大英圖書館のコレクションがある。インディア・オフィスのコレクションは二二點からなり、後に見るようになりかなりの數の歴史文獻が含まれる。本來誰の収集にかかるものかは明らかでないが、殆どの寫本が一八九六年九月八日付けで一括して受け入れられている。大英圖書館の寫本は、ヤングハズバンドとスタイ

ンにより寄贈されたものが主であるが、ヤングハズバンドの寄贈寫本には、彼の伯父ロバート・ショウによる書き込みが認められるものがある。恐らくはショウの藏書をヤングハズバンドが受け継ぎ、ついで大英博物館に寄贈したものである。英國ではこの外ボードリアン圖書館に若干の寫本が存在するとも聞くが、筆者は未だ調査の機会を得ない。ヘルシンキにもマンネルハイムによって齎された若干の寫本が存在するが、これらはいずれも聖者傳である。<sup>24</sup>

ヨーロッパ人の旅行者や研究者により東トルキスタンから歐米各地の圖書館に齎されたウイグル寫本は、右に挙げたものが總てではあるまいと思われる。從來この分野は、トルコ學者たちの關心の對象となることが甚だ稀であつた爲、未發表のまま放置されている寫本が存在する可能性は高い。<sup>25</sup>

以上述べ來たところは、ウイグル文獻學の外貌にすぎないが、これによって我々の研究對象が東トルキスタン史と總體としてのトルコ文獻學に占める位置を聊かなりとも示し得たと思うので、以下では本論の歴史文獻について述べたい。先に見た如く、十六世紀の東トルキスタンの文化的言語はなおペルシャ語であつた。歴史文獻も例外ではなく、この世紀で唯一最高の歴史書『タリーヒ・ラシーディー』はペルシャ語で著されている。殊に歴史文獻の分野ではペルシャ語の優位は次の世紀にも持ち越され、マフムード・チョラーヌもペルシャ語によってその『年代記』<sup>26</sup>を書いた。しかし十八世紀に入るとウイグル語による歴史文獻が出現する。その掉尾を飾るのは無名氏の『タリーヒ・カーシュガル』で、その著作年代は不明ながら十八世紀初頭までの事件の記録である。<sup>27</sup>この世紀の後半には、ウイグル語は完全にペルシャ語の優位を覆えた。そのことは、この時期以降多くのペルシャ語作品がウイグル語に譯されていることから窺うことが出来る。ムハンマド・サーディク・カーシュガリーが『タリーヒ・ラシーディー』をウイグル語に譯し、ついでこの歴史書の續篇とも言うべき所謂『タズキラ・イ・ホージャガン』<sup>28</sup>をウイグル語で書いたことは、この傾向の顯著な現れであつた。恐らくはこの時期に、ウイグル語しか解さない讀者層が出現し始めたのであろう。十八世紀の歴史文獻としてはこ



の外には、一七六七年に書かれたムッラー・ムハンマド・アブド・アル・アリーム(29)の『イスラーム・ナーメ』とアフメツト・テミル氏により刊行されたフラグメントが知られるのみである。<sup>30)</sup>

このように、未發見史料が存在する可能性は有るにしても、十六世紀以降のウイグル歴史文獻は極めて僅かなものに過ぎなかった。それ故一八六四年の反亂勃發から今世紀初頭にかけての半世紀に、大凡二十篇を越える歴史文獻が著されたことは東トルキスタン史上特異な現象であつたと言ひ得よう。ウイグル文獻學者の第一世代とも言ふべき初期の寫本收集家達が特に注目したのもこの分野の文獻であつた。即ちロシアでは、パントツフ、カタノフ、バルトリド、ヨーロッパではグルナール、ロス等が若干の寫本の刊行や紹介を行なつたのである。その後ヨーロッパにあつては研究は杜絶してしまつたが、ソ連では一九四七年にウスマーノフがこれらの文獻の全般的な紹介を行なつたのを契機に研究が復活し、以後チホーノフ、ユーディン、イブラーギモヴァらによつて、文獻そのものを對象とした研究や、これらを利用した一八六四年の反亂とヤークープ・ベグ政權に關する研究が發表された。更には前掲の二種の解題目錄も刊行され、レニングラード所在の寫本に關する限りその大凡は既に明らかにされている。ところで興味深いことには、筆者が調査し得たロンドンとパリに存在するこの分野の寫本は、その殆どがレニングラードの寫本とは別の作品であり、重複するものは僅か少數に過ぎない。これらの寫本は今日まで全くと言つて良い程研究されてはおらず、學界には未知のままであつた。アラブ文獻學におけるブロッケルマン、ペルシャ文獻學におけるストーレイの仕事に範を取り、チャガタイ文獻の作者とその作品、寫本の所在や從來の研究に關し可能な限りの情報を収集したホフマン氏の大著(31)から、これらの寫本はほぼ完全に缺け落ちてゐる。それ故以下では、これら未紹介の五點の作品を中心に、現在までに筆者が目睹し得た文獻を紹介する。各所藏機關は以下の略號で示すこととする。インディア・オフィス圖書館 (IOL.)、フランス學士院 (IF.)、大英圖書館 (BL.)、フランス國民圖書館 (BN.)。

I *Yaqub Begdin ilgari Kaşarni algan Siddiq Begning dastan tazhirasi* (ヤークーブ・ベグに先立ってカーシュガルを占領したシッディーク・ベグの物語) IOL, Ms. turki 3°. 著者 'Qāzi 'Abd al-Bāqī Kaşgari'. 寫本作成者 'Mirzā Calāl al-Dīn Abūn'. 寫本作成年、一二八二年、ヒジジの年、cumādī al-avval 月一三日 (一八六五年一〇月四日)。二八葉。

作品自体には、著者やコピストの素姓を窺わせるような記述は全く含まれていない。が著者の名から判断すると、彼はカーシュガルのカーズイーであつたと思われる。シッディーク・ベグ (もしくはサディーク・ベグ *Sādiq Beg*) は、トライギル・キプチャク *Turaygir Qipčaq* 部出身のキルギズで、咸豐七年 (一八五七) のワリー・ハーンの侵入に際してその鎮壓に功を立て、清朝からタシュマリクのハーキム・ベグに任じられていた。<sup>22)</sup> 彼が武装反亂に踏切つた経緯に關する本書の説明は他の史料には見られぬ特異なものである。

さてこのカーシュガル地方の時のハーキムにして、クトルグ・ベグというハーキムが居た。彼は老齡で權威があり、洞察力に富んだ賢い知慧ある人物であつた。彼の (配下に) 七四人の首領たちが居た。皆勇敢で力があり賢かつた。彼等のうち、イェンギ・ヒサールに屬するパッラーシュ *Farrās*<sup>23)</sup> というキシラクのハーキム、シッディーク・ベグという人物はオイ・タグ *Oy tag*<sup>24)</sup> に屬する總ての地域の何千帳ものキルギズ・キプチャクの長であつた。彼はハーカーンに仕える役人であつた。一日、カーシュガルの城市に若干の土地の訴訟が生じ、(事案は) ハーキム・ベグの前に呈出された。ハーキム・ベグは正義を以て訊ね、(解決を) シャリーアに委ねた。これらの土地の訴訟について聖法に照し、ファトヴァーを得て討議しようとしていたところ、カーシュガルの役人たち、ヤークーブ・ドゥールガ・ベグ、ナザル・シャーン・ベギ、を始めとする十數人が訴訟して、「かのシッディーク・ベグから土地を奪おう。他のユルトの者に土地を與えまい」という考えで、カーズイー・カラーン、ハーッジー・アーラムの許に行った。

(彼は) この地方の首領たちの考えを納れて味方し、「我らは土地を與えまい」と(ファトヴァーで)言ったので、シッディーク・ベグの心は大いに騒ぎ、十乃至二十人と共に敵意を燃して、そこより乗馬して自らのユルトに歸り着き、七日の間、すべてのオイ・タグのキルギズ・キプチャクを集めて相談した。「俺の若干の水土をカーシユガルの民の大小の首領どもが奪い取り、聖法の坊主どもも一緒になって、俺に多くの非難・非法を加えた。皆グルになっている。俺は怒って戻って來た。皆どう思うか」と言った。(二a—二b)

相談の結果キルギズの首領たちは反亂を勧め、シッディーク・ベグは支配下のキルギス・キプチャクから一家に一人を徵集し、一萬七千の兵を整えてカーシユガルに進撃した。(三b)

右に述べられている蜂起に至る経緯は、必ずしも總てが信用に値するものではないかも知れない。例えばベリユーは、カーシユガル市内での最初の蜂起の後、アルトゥシュの白山黨の首領が秩序恢復の爲にシッディーク・ベグの介入を求めたと傳えているし、筆者は未見であるが、『ジャム・アツ・タヴァーリーフ』(Cam' al-tawarikh)の著者ハーッジー・ユースフも、蜂起した農民たちがカーシユガルの新舊兩城を包圍して三日目にシッディーク・ベグが三千人を率いて反亂に加わったと傳えているという<sup>(36)</sup>。がこうした他の史料との齟齬にも拘らず、右の記事は土地の係争にかかる訴訟の具體例を傳えていて興味深い。ハーキム・ベグが裁判を主掌し、彼に對してムフティイではなく、カーズイー・カラーンがファトヴァーを發するというのは、イスラーム圏で普通知られている制度とは異っている<sup>(37)</sup>。

シッディーク・ベグがホーカンドに使節を送ってホージャの派遣を求めたことが、ヤークープ・ベグのカーシユガルへの侵入のきっかけになったことは周知の事柄であるが、この作品では、シッディーク・ベグがホージャの權威を必要とした事情が説明されている。即ち、包圍されたカーシユガル舊城からの使者がシッディーク・ベグに以下の如き書簡を齎す。命令書。キルギズ・シッディークへの命令はかくの如し。汝心穩やかならずして、汝の長上たちを悪しく思ひなし、

汝のユルトに（より？）軍勢を得て來たて戦いをなすは許さるべきことではない。汝もムスリムにてはなきか。ムスリムたる（にも拘らず）汝の行爲は敵意より生じている。汝預言者の裔に非ず。帝王の裔にてもなし。我ら汝に服従して城門を開くまじ。汝の手より來たれることを爲せ（即ち、分を守れという意か——譯者）ターズグリーンにおいて略奪に際し、汝の手に捕虜となりたるわが配下四十名あり。これをわが手に與えよ、以上。平安あれ。（一一b—一二a）

これを知ってシッディーク・ベグは激怒するが、「もし城市を占領し支配者となつても、誰も俺に服従しまい。終には俺を殺し滅ぼすだろう」（二三a）と考え、配下と相談の結果、先に捕えてあつたクトルク・ベグの弟、サーイード・ベグをホージャの派遣を求めてアンディジャーンへと向わせる（一五a）。著者アブド・アル・バーキーは、サーイードが遣された先をフダール・ハーンとするがこれは明らかな誤りであり、又フダールが七人のホージャザーデをカーシュガルに送った（二一b—二二a）というのにも、所謂ハフト・ホージャガーンの侵入との混同があるように思われる。この作品にのみ見える今一つの特異な記事がある。即ち著者は、シッディーク・ベグを殺して權力を掌握したヤークーブ・ベグが上述の七人のホージャザーデに毒を盛り、ブズルグ・ハーン、カッタ・トゥラを始めとする五人を殺害したと傳えている（二七a—b）。ブズルグ・ハーンの權威を背景に權力を掌握したヤークーブ・ベグは、やがて邪魔な存在になつて來たブズルグをメッカ巡禮の口實で東トルキスタンから追放したというのが通説であるが、彼の殺害の噂さも早くから存在していたらしい<sup>39</sup>。

この作品全體は、「ヤークーブ・ベグの」軍はホタンへと出馬した」という一文で終っているが、既に別稿で考證した通り、ヤークーブ・ベグのホタンへの進軍は一八六六年末から翌年にかけてのことである<sup>40</sup>。それ故この寫本の作成年月日とされている一八六六年一〇月四日という日付には大いに問題があると言わねばならない。

以上の如く、この作品にはその眞實性を疑わしめるような記述が相當に含まれており、極言すれば或る種のフィクションである可能性すら否定は出来ない。しかしたとえフィクションであるうとも、そこに伝えられている雰囲気には何分かの意味があると考ええる。即ちこの作品には、カーシュガルの住民のホージャの權威と正統性に對する確信、遊牧キルギズ族に對する或る種の差別感が反映していると言えよう。又ヤークープ・ベグをホージャ達の暗殺者として名指している點は、著者が少くともヤークープ・ベグに好意を持つ人聞ではなかったことを示している。

II *Tazkirat al-nacat* (救濟傳) IOL, Ms. Turk 4. 著者、Korlaliq Daūd. 著作年、一二八二年（一八六五—六六年）。七三葉。

この作品は、一八六四年のクーチャーにおける反亂に關する最も重要な史料の一つである。次の引用に見えるように、これはクーチャーで權力を掌握したラーシディーン・ホージャに捧げられたものであり、著者はこのスーフィーの信奉者であった。従つてこの作品は、ラーシディーン及びクーチャーのホージャたちの宗教的な威力を讚美することに終始しており、タイトルにタズキラ（聖者傳）を稱しているのも偶然ではない。それ故必然的に大きなバイアスが懸っていると見なければならぬが、視點をずらせてこのバイアスそのものを考察の對象にする時、我々の眼前には東トルキスタンのイスラーム神祕主義者たちの宗教的・政治的主張が極めて明白に展開されている。先ず冒頭の神と預言者及びその四人の教友に對する讚辭に續く實際上の序文にあたる部分を見てみよう。

物語の章。物語を聞けよかし。マヴラーナー・アルシード・アル・ディーン・ワリー・アッラー・ホージャム貌下の後裔の一人、ムスリムの長、異教徒の殺害者、サイイド・ラーシディーン・バハードゥール・ガーズイー・ハーン・ホージャム陛下に、讀むべき稱うべき神は（一語不明）と正道への導きとを贈り給ひ、（彼ラーシディーンは）諸々

の聖者方の靈魂の援助(?)もて、マヴラーナー・アルシュディーン・ワリー・アッラーよりの吉報と教導を見出だし、すべての預言者の後裔(の)ホージャムたち、ウラマー、アミールたち、貴賤のムスリムたちに對して指導者・先導者となり、稱うべき神に絶對的信を置き、不信者たちを殺し、不信の市々をイスラームの榮えるところと爲した出來事が、神護によりて一々紙の表てに書かれた。この聖戰は一千二百八十二年、サカナの年、ムハッラム月の第一日金曜日、クーチャ地方において、不信者、佛教徒たちとの戰鬪が開始された。そして聖戰の果報を望み、世界の内に記憶として留まれとて、惱めるわが心は希望を抱き、若干の詩が書かれた。さてこの書物に『タズキラトゥル・ナジャート』と名付けられた。そしてすべての市々で生起した聖戰(の物語)が詩の糸につなぎ整えられた。そして書物となして、ハーン・ホージャム・パーディシャー陛下の御目に披露された。かの政權の在り所、書籍愛好者、正義の實行者、人民の愛護者、高貴なる薔薇、偉大なる靈力(という)紙片の(上の)印章、英知の鑛山、智慧の泉、眞正なる(?)洞察、高貴なる智慧、ウラマーの友、貧者の保護者、幸福なるアミール、即ちサイイド・バハードゥール・ガーズイー・ラーシディーン・ハーン・パーディシャー陛下に對し、讃むべき稱うべき神が友となり給い、慈悲恩寵を垂れ給い、靈力と眞摯さを贈られた。朝夕いやむしろ絶え間なく、その祖マヴラーナー・アルシーディーン・ワリー・アッラー・ホージャム猊下の光輝に満ちた墓廟において、庵室、道場のうちに靜座し、(神への)服従と獻身に専念し、絶えず斷食し徹宵して、ハーン・ホージャム猊下は修業と努力を行ない、コーラン、勝利の諸章、救済の祈禱、聖なる長禱、定められた時刻の祈りを唱え、その功德を聖者の靈魂に供養し、祈禱と謙讓を爲し、救済を求め望みをもって座していた。そして讃むべき神は慈悲恩寵を垂れ給い、世界の長、最大の預言者——神が彼を祝福されんことを——とすべてのホージャガーンの道統(に屬する聖者たち)——神が彼らの魂を淨められんことを——が(ラーシディーンの)友となった。(ラーシディーンは)「われ神を信ず」と言つて、貴き命を犠牲に捧げ、聖戰に向つ

て堅く帶を締め、自らを讀むべき神に委ねて、過ぎにし殉教者たちの血（の代償）を求め、復讐を行なった（という）諸事件。（二b—四a）

右の引用に見える通り、ラーシディーン即ちハーン・ホージャムは、モグーリスターン・ハーン國のトゥヴルク・ティムール・ハーンをイスラームに改宗させたと伝えられるアルシュディーン（もしくはアルシャド・アル・ディーン）の子孫であると稱していた。<sup>41</sup> 彼がナクシュバンディーヤ教團の流れを汲む者であることは、右の引用中に「ホージャガーンの道統 *Silsila-i 'Iyācagān*」という語が見えるところからも明らかであるが、ここに伝えられている彼の姿は極めて隱遁的なスーフィーのそれであり、「人境における獨座 *balvat dar anman*」を唱え、隱遁生活を非とするナクシュバンディーヤの教義とは齟齬を生じているようにも思える。<sup>42</sup> この點は、或いは東トルキスタンにおけるナクシュバンディーヤの獨自の變化を示しているのかも知れない。

ラーシディーンの「御目に披露」するためにこの書を著したコールラのダーウドは、自身について以下のように記している。

ダーウド・アホーンは聖戰に友となり／戰旗の傍らに毅然として立った。

カラ・シャフルの聖戰に赴き／一千の兵士に對し祈禱者となった。

トゥルファーンの戰さに十ヶ月留まり／勝利戰勝を祈願してコーランを誦んだ。

コールラーのアホーンたちは勤めを爲し／この聖戰において靈力を盡した。

日夜祈願を離れず／道場、墓廟に臥した。

勝利戰勝の爲に祈願して／この聖戰に生命を使い果した。（二〇b）

著者が自分たちコールラーのアホーンの聖戰に對する獻身を言いたてるのは、權力者からの恩賞を當てにしてであろう

ことは想像に難くないが、ここで注目すべきは、いわば從軍スフィードでも呼ぶべき者の存在である。右に見えるように兵士たちの爲に祈禱を唱え、聖者たちの墓廟で戰勝を祈願することが彼らの任務であった。詳細な分析は、クーチャー蜂起の性格を取扱う筈の別稿に譲るが、蜂起の迅速な擴大を可能ならしめた重要な要素の一つは、彼らによるプロパガンダであった。彼らは聖戰が宗教的義務であることを強調し、義務を果して死ねば天國の快樂、果さねば地獄の責苦に遇うとの脅迫を行ない、更には略奪によって得る現世の利益をも付け加えて、人々を蜂起へと誘ったのであった。

この聖戰は人たる者の義務である／神の命令なるぞ。おおムスリムたちよ。

戰さを爲すことは義務である／人々の首に（課せられた）借金である。

心の眞實もて戰さを爲すこと／神の道に生命を犠牲にすること。

聖戰で死なば殉教者となるべし／その人の（來世の）場所は天國なるべし。

もし生き残らば宗教戰士となるべし／清らかに神の果報を見出だすべし。

この聖戰の道に命を捧げること／その名聲に對し食糧を與えること。

人、イスラームの民に加わらぬならば／地獄のうちに苦痛を見るべし。

敵もしイスラームの王者に矢を射らば／聖法の命令は猛火となるべし。

人々逃ぐれば罪人たるべし／むしろ地獄に虜囚たるべし。

（敵を）殲滅することは義務である／暴力もて彼に報いること。

命を惜しんで出でざれば罪人である／彼は神の怒りに虜囚である。（二六b）

略奪について見ると、例えばベシ・テレクにおける勝利の後の有様は以下の如くに伝えられている。

勝利品を取ることに足を踏み入れた／土地の者もカルマックも皆満足した。



この（殺された）中國人たちの錢が遺された／イスラーム軍は戰利品を取った。  
すべての者が至り、心のままに取った／（餘りの）多さ故取り切れぬ程であった。

中國人の父を殺し／その妻と子を取った。

様々の財貨が手に入った／この聖戰において富者になった。（三八b—三九a）

右に見えるカルマックは即ちユルドゥズ谿谷のトルグト族のことであるが、著者はカラ・シャフルへ進撃したムスリム蜂起軍と異教徒カルマックとの極めて興味深い關係を傳えている。

中國人の間にカルマックが居た／（中國人から）離れて六百のカルマックが逃れて來た。

このホージャムの方へと逃れ來て／カルマックは友となり合流した。

「われら中國人たちを欺き／ハーン・ホージャムに信賴を置いた。

われらは身も心も救われた／われらはホージャムたちに税を拂う。

嗚呼、ホージャムよ、われらカルマックは奴隸なり／任務あらばそれに赴かん。

何處で見つけてもわれら中國人を殺した／彼らの家と佛像を焼拂った。

嗚呼、ホージャムよ、われらがユルトに疾く戻り／すべてのカルマックにわれら吉報を傳えん。」

カルマックの罪を赦し／戰利品のなかから牛馬を與えた。

カルマックは許しを得て歸った／カラ・シャフルの中國人を拒んだ。

イスラーム軍は（彼らに）平安を與えた／彼らの腹に食糧を與えた。

カルマックたちは嬉んで／直ちに彼らの家に戻った。

すべてのカルマックが（この事を）聞いた／彼らは互いに（再）會した。

ハーン・ホージャムに誠意を盡し／カルマックは死ぬことなく解放された。

カルマックは元の状態を好んで／信仰告白を唱えず、依然しまりが無かった。

信仰告白を唱えずば、彼らの頭は（早晚）無くなるであろう／手中の財貨もすべて無くなるであろう。

（しかし）ホージャムは（彼らを）讃むべき神に委ねた／（彼らの）後を見送り、苦痛を與えなかった。

カルマックの物語はこれで終りである／（彼らは）善行を爲し、安全であった。（三三a—b）

これは、全篇を通じて不信者に對する聖戰を鼓吹するこの作品の中のただ一つのエピソードに過ぎないし、清朝に對する被支配諸民族の連合と呼べるようなものでもとよりない。しかしながら「起義のヘゲモニーがイスラームの宗教頭目に篡奪されてより、彼らは『聖戰』を鼓吹し、廣大な非イスラム教民族の人民をも屠殺の對象とした<sup>43</sup>」という斷案に對しては一つの反證となり得るであろう。

この作品にはこれ以外にも、殊に宗教社會史の面に關する多くの興味深い情報が含まれているが、それらについては稿を改めて論じることにした。

### III *Zafar-nama* (勝利の書) IOL, Ms. Turki 5. 著者 *Muhammad 'Alī Hān Kašmīr*. 著作年、一二八四年（一八

六七—六八年）。九五葉。

この韻文の作品の著者をムハンマド・アリー・ハーンとするについては、若干の問題が存在する。彼の名は、ヤークーブ・ベグのクーチャー征服までを誌した本文には現れず、清朝征服の後に書かれたと覺しき末尾に付された詩に、「この詩を書きたり。かのムハンマド・アリー・ハーン・カシミール／彼は中國に留まらなかった。各々又正義へと移り行け」という句に一度見えるのみであつて、これのみを以て彼を本文の著者とするには聊か根據薄弱と言わねばならない。「カ

シミール」を名乗りとする人物が、何故クーチャアの蜂起を記録したのかも疑問とするに足りよう。しかし、この點に關連して、以下の如き詩句の存在が注目される。即ち蜂起以前の清朝の壓制下のこととして、

ホタンの民はヤールカンドに逃れ／ヤールカンドの民はカーシユガルへ去り、  
カーシユガル人はブハーラーへ行き／残りの人々は山や荒地へ逃れ、

或る者はメッカへ巡禮に赴き／或る者はカシミールに居を定め、

口實有れば、すべての者が一方に／一方とや言わん、あらゆる方向に去った。

人々はこの亡命から百の喜びを見出だした／喜びとや言わん、百千の安穩を。

その心には祖國の思い出浮かばず／ヤールカンドもカーシユガルもホタンも。

その心は祖國に結ばれることから自由となり／この自由から千萬の喜び（が生じた）。

この亡命において祖國を思い出すことなく／彼、祖國を思い出して亡命を苦しむこともなかった。

彼には亡命（地）が祖國であり／祖國の思い出は彼には悲しみの家であった。

絶えて祖國を思い出すことなく／喜びは彼の心を悲しませなかった。

突如祖國の思い出が心に落ちれば／全身に震えが走った。

天命のままに幾年月／幾週間、はたいかほどの期間が過ぎた。

忘却から（覺めて）突然祖國の方へ／來たり見た。祖國のことを知った。（九b—10a）

右の引用部分が著者自身のことを述べているとは斷言は出来ないが、清朝治下の東トルキスタンからカシミールに逃亡し、そこに定住していたウイグル人が存在したことは明らかである。この部分を前引の末尾の詩句と結びつけた上で假定すれば、著者ムハンマド・アリー・ハーンは、清朝治下の新疆から一旦カシミールに逃れ、その後何らかの理由で新疆に

戻り、清朝の再征服後再びカシミールに逃亡した人物であると考えられる。その間彼がクーチャーからの西征軍に参加したことは本書から確實に知られるが、恐らくはハーン・アリクでのクーチャー軍の敗北を契機に、ヤークープ・ベグの陣營へと移ったらしい。

この作品の冒頭部は他の作品に比して際立った特色を示している。即ち、作品の冒頭においては神への頌辭が述べられ、預言者とその四人の教友へのそれが続くのが通例であるが、この作品で先ず讀えられるのは言葉の徳である。しかも「それ（言葉）にとりて、コーランは修辭の王冠である」という一句はあるものの、ここでいう言葉はロゴスのことではなく、修辭 *fesāhat* 美文 *balāgat* としつゝの言葉である。そして續く一節では言葉の徳の體現者としてのアリー・シール・ナヴァーイーに頌辭が捧げられている。

言葉の樂園のナイチンゲールの喜ばしき聲音、意味の天界の輝ける太陽、トルコ人の美文家たちの王中の王、詩の薔薇園の雄辯家たちの喜ばしき鳴き聲、即ちマヴラーナー・ニザーム・アル・ディーン・アリー・シール、號ナヴァーイー、彼は筆舌による描寫・頌辭の及ばぬところである。この章では、（我）自らの菲才なることを示し、彼の純一なる清淨なる魂からの援助・救いを望んで清らかなるファーティハを讀み、（その祈りに）彼が満足することを望み、又その果報を集め取ることを期待して、血涙を濺ぎ、渴望の餘りに餓えたることの物語を語る。

彼は言葉の天界の太陽／修辭の世界の月。

又彼は言葉の樂園の嫩き薔薇／美文の宴席の比類なき勇者。

意味の大海の潛水夫である／言葉において、奇蹟の主である。

彼はトルコの文筆の王者／トルコの民にとりて彼は預言者。

トルコという言葉において王たることは疑う餘地なし／王たることと言わんや、預言者たること疑う餘地なし。（三 a）

b)

又この節の終りに言う、

又かのミール・ニザーム・アル・ディーン・アリー・シール／われは知る。彼われにとりて先導者・師なることを。

彼わが手を取りて、わが事において導き給えかし／わが道に先立って、道を示し給えかし。

わが事を成就させよかし／わが頭上よりこの欲望・苦惱去れよかし。(六a)

十九世紀の東トルキスタンにあって、ナヴァーイーに溯る文化傳統は強く意識されていたのである<sup>44</sup>。ところで著者が預言者ムハンマドに代って、「トルコの民の預言者」ナヴァーイーに頌辭を捧げていることをもって、彼の反宗教的乃至は非宗教的傾向を示すものと理解しては誤りであろう。確かに後に見るように、彼はスーフィーたちに對してもあからさまな批判を加えてはいるが、ナヴァーイーの魂に向ってファティハを讀誦し、祈願を行なっていることから明らかにように、神祕主義的イスラームの靈魂觀は彼にあって強固に保持されていた。むしろ、ナヴァーイーが、マヴラーナー(われらが主)というスーフィー的な敬稱で呼ばれ、聖者として扱われている點にこそ注目すべきである。

この作品では、更に二つの特色を指摘することが出来る。その一つは、ここでは詳しくは立入らないが、事件の本筋とは直接には關係の無い、修辭に富んだ多くの詩句の存在である。しかもその多くは、イスラーム・トルコ文學の主流である所謂神祕的戀愛詩<sup>45</sup>ではなく、世界の無常を詠嘆する悲哀の詩である。一例をのみ上げておこう。意味の良く把握出来ぬ點もあるが、ここでは世界の移ろい易さは、水中に橋脚を持つ橋のイメージで示されている。

世の譽れは常なく／時世の榮えは信なし。

世界は水上に基い(を置く)と見つけたり／水上に基い(を置いて)などて人が住めようぞ。  
などて言いし、世界を人の住み家なりと／橋は水中に没するものなるを。

世界を大なる煉瓦と知れ／その四分の三は水中に隠れた（煉瓦と知れ）。

水中にあつてどうして土に基い（を置けようぞ）／土は水に融け消滅したるに。（二七b一一八a）

第二の特色は、著者が権力者に向ける假借のない非難である。殊に不信者 *kafir* に従つて同宗者に對して壓制者 *zaim* となつた者への非難は激しい。

この國の内にムスリムの首領とて／すべての地にベグ、ハーキム、役人を置いた。

多くのベイレ、ベイセ、ワン（を置き）／彼らで世界中一杯になった。

又、イシク・アガ、ハザナチ、シャーン・ベグ／彼らは皆性惡の犬<sup>46</sup>。

彼らの各々に多くの從者／官服の威光に従つた。

又アンバン、ダールーヤには通辭（が從つた）／菜葉野郎に瓜野郎<sup>47</sup>。

この輩はこの事（異教徒への服從）を光榮に思い／彼らの仕業はすべて非道。

そのすべての行爲は罪惡／いちいち語れば、言葉は優美さを失つてしまふであらう。（中略）

ピティクチ、ムッラーたちの（別）名はアホーン／毎日非道にも千の血を流さしめた。

ベグ、ムッラー、ピティクチ、オン・バシ／又キョク・バシ、ユズ・バシ、そしてオン・バシ<sup>48</sup>。

不信者は壓制者が生きて居れる原動力／不信者の死は彼（壓制者）の死。

壓制者が魚なら、彼にとつて不信者は湖／もし不信者が死ねば、壓制者も無し。

この壓制者は外見はムスリムなるも／眞實は皆ムスリムに非ず。（中略）

もしアンバンが命令し／人民から税を取らうとすれば、

中國人の命令がもし一枚の綿布なら／通辭は出でてこの一枚を百枚となし、

ハーキムは（命令を）知つてこの百枚を千枚とし／ベグたちはこの千枚を一萬枚となした。（七a—八a）  
著者の非難は又スーフィーたちにも向けられている。

イーシャーンの群れが世界の表てを占め／イーシャーンの子孫たちも亦無數。

人々から祈願（の爲の）獻納を取り／多きを求めて少なきに満足せず。

獻納が少なかった。御慈悲を下さる方に對し罪なるぞ／と言いて、イスラームを裏切った。（中略）

獻納を取る爲に互いに争い／かくの如き譽れと知慧ある人々が争った。

イーシャーンは地表を占めて／人々はイーシャーンから逃亡した。（三二a）

ここで著者が激しく非難している所謂ベグ官人とイーシャーン即ちスーフィー指導者たちは、清朝支配下の新疆におけるウイグル人側の有力者であった。前者は清朝の軍事力を據り所として民衆を支配し、後者はその宗教的權威によって民衆に寄生していた。蜂起によって清朝の軍事力が一掃された後、各地で反亂の領導權を掌握したのは後者即ちスーフィーたちであり、ベグ官人たちの若干は蜂起に際して殺害され、または自發的乃至強制的に蜂起に加わった場合でも權力を手中にすることは出来なかった。このことは東トルキスタンにおけるスーフィーの宗教的權威（その實體については稿を改めて考察する）が、清朝支配下で培われた筈のベグたちの權力を凌駕していたことを示している。

著者の批判精神は右に見た通りであるが、最後に付言すべきは、彼の批判は決してヤークーブ・ベグには向けられていないということである。この作品の後半部では、著者は新しい支配者ヤークーブ・ベグを正義の王として稱讃しており、「勝利の書」という題名自體明らかにヤークーブ・ベグの勝利を祝ぐ爲のものである。なおこの作品の著作年は、「勝利の書はこれなり」zafar-nāma bu というクロノグラムで示されている。<sup>49</sup>

IV *Dastan-i Muhammad Yaqub Beg* (ヤークープ・ベグの物語) IOL, Ms. Turki 6. 著者, Mirza Bi. 著作年, 一二九四年 (一八七七年)。寫本作成年, 一三二一年 *cumadi al-avval* 月 (一八九八年十一月一〇日—十二月九日)。二〇葉。

冒頭のタイトルの全體は以下の如くである。

物語の章。ムハンマド・ヤークープ・ベグ・ベダヴラト・ガーズイー・ターシュカンディ、カーシュガル地方の皇帝陛下——彼に恩寵あれ——がアルティ・シャフル (及び) ウルムチ、マナス、クマディ (古牧地) までの皇帝となつたことの物語を詩に作る。

タイトルには詩に作るとあるものの、第八葉の半ばまでは散文で、ヤークープ・ベグの支配體制の大凡と彼のひとりとなりを傳え、以下は韻文でトゥルファーン、ウルムチへの遠征をやや詳しく述べ、第一八葉以下ではそれ以後清軍による再征服までを極めて簡略に述べている。著者ミールザー・ビーはヤークープ・ベグのミールザー (書記) の一人であつたと覺しく、トゥルファーン方面への出陣を命じるヤークープ・ベグの敕書をホタンのハーキム、ニヤーズ・ベグに齎し (一〇b)、彼と同道してアクスーへと向つた。著者がニヤーズ・ベグを「わがベグ」*begim* と呼び、「ベギムは我に多くの恩恵を與え」とも言っている點は、著者とこの人物との親しい關係を暗示している。ニヤーズ・ベグは、多くのウイグル史料の著者たちからヤークープ・ベグ暗殺に責任があると名指されているが、この作品ではヤークープ・ベグの死についてはただ一行、「最後に、一二九四年ジュマーディー・アル・サーニイ月一日 (一八七七年六月二三日) 常なき世から永しへの世へと去つた」 (一八b) とのみ述べて、その死の具體的な經緯に言及しない點も、この關係を窺わせる。書記である著者は古典的文學にも通じていたらしく、韻文の部分は以下のように始められる。

一日道に出合いたり。心魅する者に／彼の頭上には金色の上衣あり。



我は戀う者。彼は戀わるる者／わが神彼を贈り給いぬ。

わが戀人の何處に行くとも／我、彼を慕い行きたり。

かの戀人は王者なり／我は一介の病者、いと卑しき乞人。(八b)

詩人が權力者を戀人に見立てることは、イスラーム圏の文學の常套であるが、事實著者はヤークーブ・ベグを理想的帝王として描き出している。

(ヤークーブ・ベグは) 高貴なる聖法に日々光輝を加え、アルティ・シャフルの異教徒、惡しき宗教・惡しき行いの者たちに信仰告白を唱えしめて、(彼らを) ムスリムとなし、大小の事をなさしめた。佛寺をマスジッドとマドラサに改めしめ、あたりの利益灼然りやくいやくとの墓廟をあらたにきよらかに完全に修復させた。すべての方面とすべての地方の道路の多くの場所にマスジッドと驛亭を置かせ、道路に木を植えさせた。人民、貧民、被抑壓者、弱者、孤兒の狀態を日夜見守り、知悉していた。夜は大概、平民もしくはカランダルもしくはダルヴィシユの姿で外出し、人民の狀態を見守っていた。その正義には限りが無かった。白髮の老人、寡婦、被抑壓者たち、孤兒、弱者が請願をなせば、多くの厚意と憐憫を示し、請願人の許に至って又恩寵を與えた。毎日二時間座して、請願人(の訴え)を聞いた。(一a—b)

ヤークーブ・ベグが極めて厳格な支配者であったことは多くの史料に語られるところであるが、この作品には外には見えない恐ろしいエピソードが含まれている。即ちヤークーブ・ベグは、人民の驢馬を射殺した息子のフダイイ・クリ・ベグに對して怒りを爆發させ、「お前はベダヴラト陛下の息子なるぞ。わが父はセキズ・シャフルに支配者なりとて、お前は人民に暴力を加えたのか」(四a)と言って、フダイイ・クリ・ベグを自らの手で毆殺したというのである(三a—四b)。ヤークーブ・ベグにフダイイ・クリ・ベグという名の息子があつたことは、ターリーヒ・シガリーにも見えるが、この

名はフォーサイス使節團の報告書中のヤークープ・ベグの息子たちの一覧の中には現れない<sup>⑤</sup>。従って、父の手に懸ったか否かはともかくも、ターリーヒ・シガーリーにその名が見える一八六五年からフォーサイス使節團の到着（一八七三年）までの間にフダーイ・クリが死亡していたことは確實である。

この史料の今一つの注目すべき點は、恐らくはトゥルファーン征服直後と思われる時期の各地のハーキム・ベグの名とその麾下の兵力が列擧されていることである。人名と兵力のみを移録しておこう。

カーシユガル新城、フー・ダールーヤ（何步雲）、改宗漢人千五百。カーシユガル舊城、アラシシュ・バーイ・ダード  
ハーフ、三千。イエンギ・ヒサル、ムッラー・ナジム・アル・デイン、千五百。ヤールカンド、ムッラー・ユヌス・  
ジャーン・ダードハーフ、六千。ホタン、ニヤーズ・ハーキム・ベグ、一萬二千。アクス、アブド・アル・ラフマーン・  
ダードハーフ、六千。ウチ・トゥルファーン、マフムード・トクサバ、千五百。バーイ及びサイラーム、ニヤーズ・ムハ  
ンマド・トクサバ、二千。クーチャー、アミール・ハーン・トゥラ、三千。

クーチャー以東に關する記録が無いのは、恐らくはこのリストがトゥルファーン・ウルムチ遠征直後の體制を示すもので、この地方の支配體制が依然確定されていなかった所以かとも思われる。

A *Buzhan* (sic) *Turam bilan Yaqub Begni urq'asi* (ブズルグ・ハーン・トゥラムとヤークープ・ベグの事件) If, Ms. 3398-7. 著者不詳。六葉。

これはグルナールのコレクションに含まれる僅か六葉のフラグメントで、右の題名も表紙に鉛筆で書き加えられたものであり、恐らくはこの作品本来の題名ではない。グルナール・コレクションの若干の寫本の表紙には、同一人の手になると思しき鉛筆書きのタイトル（それも往々にして誤っている）が書き付けられている。書體から見てグルナール自身の手

になるものとは考え難く、或いは彼のインフォーマントの筆かも知れない。

僅か六葉の斷片であるが、この寫本は極めて奇怪な内容を含んでいる。作品の冒頭では、シッディーク・ベグがホーカンドのフダーヤール・ハーンに預言者の子孫の派遣を要請したことが語られる<sup>53</sup>。フダーヤール・ハーンは極めて丁寧にブルグ・ハーンを送り出す。この時ワリー・ハーンは手紙を送り、ブルグの出發を一時留め彼に財物を贈ろうとするが、ミルザー・アフマド・クシュベギはその手紙を手に入れ、財物をも横領してしまう。この情況にヤークーブ・ベグが登場するのであるが、そのくだりは以下の如くである。

ヤークーブ・クシュベギはロシアとシターン湖(？)をめぐって戦い、敗北を喰つて戻ったが、城市に入れば(フダーヤール・ハーンの)怒りに遇うことを恐れ、城市を離れてカザフの間を通り、タフティ・スライマーンに来てそこで下馬した。ミルザー・アフマド・クシュベギに遇い、荷物(ワリー・ハーンの財貨のこと)のことを尋ね眞實を知った。彼(ヤークーブ)に従っていた二千の騎馬隊が居た。彼はミルザー・アフマドと荷物を手中にして、カーシュガル指して進んだ。數日にして、カーシュガルに来て、トゥラムと會見し挨拶をして戻った。その翌日は挨拶に出ず、一通の手紙を書き送った。この手紙は「支配は私が行なおう。トゥラムは祈禱をせよ」という手紙であった。

(五b—6a)

又この手紙を読んだブルグ・ハーンの言葉として言う。

餘はシッディーク・ベグが(フダーヤール)・ハーンに請願し求めた(が故に)やって來た。この城市にイスラームを釋き廣め、兵を集めて支配者となるには、シッディーク・ベグが(既に)存在している。我々がコーカンドに居た時、(ヤークーブ・ベグは)ロシアとの戦いに出ていた。彼はどこから出現したのか。ここへ後からやって來て王權の玉座を要求するのか。(6b)

一見して明らかな如く、この作品ではヤークープ・ベグが敵役を割當てられている。ヤークープ・ベグがブズルグ・ハーンに従ってカーシュガルに來たったことは、これに同行したアブド・アッラー・パーンサド始め多くの信用に値する史料に一致して見えるところである。従つてこの作品の記述は信じ難く、創作であることは明らかである。その創作の意圖を推測するに、恐らく著者はブズルグ・ハーン以下のカーシュガル・ホージャたちの正統性を主張しようとしたものと考えられる。この作品の内容そのものには史料としての價值は無いが、こうした創作を行なつた人間が存在したという事實は、東トルキスタンにおけるカーシュガル・ホージャ家の權威の根強さを暗示するものと言えよう。

VI *Tarh-i carida-i caida* (新史) IOL, Ms. turki 2. 著者 'Qurbān 'Alī valad-i Hālid Hāccī Ayāgūzī'. 著作年、一

三〇六年（一八八六—八七年）。書寫年、一三二〇年 *rūza-i 'id* (*sāval*) 月二十七日（一八九三年五月一四日）。七四葉。

筆者が目睹し得たこの作品の寫本は右のインディア・オフィス圖書館に所藏されるもののみであるが、これ以外にもレニングラードに一本が存在することが知られ、又既に一八八九年にはカザンで刊行されている。インディア・オフィス寫本は、その最後に書き加えられた書寫の日付けに續く四行詩に「責むべき誤りは多くとも責め給うな。（この書を）讀む人々祈りもて忘れ給うな。ムッラー・クルバーン・アリー書きたり。祕めやかに祈れよかし」とあるところから、恐らくは著者自筆の寫本かと思われる。

著者はロシア領セミレチエのヤーグーズ（セルギオポール）の出身者であるが、チュグチャク即ち塔爾巴哈台に移住してその地のモスクのカーリー（コーラン讀誦者）を務めていた。彼は又ロシアのトルコ學者カタノフのインフオーマントであったことが知られている。<sup>(5)</sup> 彼には更に *Tarh-i hamsa-i šarqi*（東方五ヶ國史）と題する著作があり、これも一九一〇年にカザンで出版されているが、筆者は未だ目睹の機會を得ない。

この作品は、「ターリーフ」とは題されるものの、純然たる歴史書ではない。著者自身冒頭に「この書はトゥルファーン周辺の地に存在する聖者たちの、又それらの地方と関係のある地域へ至る旅行の道筋に存在する諸々の聖所 *ṣayārat* の傳承と物語を語るものである」(二b)と述べている通り、トゥルファーンを中心とする地域のいわば聖蹟案内書である。従つてその内容も非歴史的な宗教傳説が中心であるが、實在の歴史的人物とこれらの聖蹟とのかかわりについても述べられている點も見逃せない。著者は實際にこの地方に旅行してその見聞を記録したのであるが、彼は一人の先達を持っていた。

さて(ここに)書かれた傳承、寫された物語を知することは、すべてわが親友ハーッジー・イスマール・エフェンディの努力と情熱とを以つて成つた。このわれらの友人は、アルテ・シャフルの首都カーシユガル出身の故を以つて、この地方は自らの通ひ慣れた鑛山(?)であり、その地の慣習、法制、法規に通じていた。これより以前にトゥルファーン地方を探查し通過していたが爲にその地の人々とも親密であり、そこかしこに學者や高德の人が有れば、某を彼らの許へ遣り面會させた。(中略)この眞摯なる友人が勞苦を厭わぬ情熱の持主であつた故に、埋れたままであつた情報が明るみに出、一冊の本となつたのである。(六五b)

この作品のおよそ半分即ち第二〇葉から第五葉までは、トヨクにある「七人の眠り人」*aṣṭab al-kalīf* のマザールに關する傳承に當てられている。地中海世界のキリスト教徒の間に起源を持つこの傳説は、一方では中世ヨーロッパに傳翻し、又一方では「洞窟の章」としてコーランに取り入れられた爲、全イスラーム世界でも著名になつた。本來の傳説では、七人の若者が暴君の迫害を逃れて籠つた洞窟は小アジアのエフェソスにあるとされるが、イスラーム世界では様々の場所にその洞窟であると稱する聖所が存在し、その最も東方に位置するのがこのトヨクのマザールである。<sup>66</sup> 著者クルバーン・アリーはエフェソス *Afsūs* がトゥルファーンの轉訛であるとか、ウルムチは實は *Rūmča* であつて、即ち「小ルーム」

のことであるとかの珍説を紹介し、エフェソスが東トルキスタンに存在したことを證明しようとしている。

第五五葉以降はトゥンガンに關する傳承を傳えるが、その前半は中國へのイスラームの傳來に係り、後半は「我々の時代における戰鬪の擴大」と題して、陝西、甘肅、新疆におけるトゥンガンの反亂について傳えている。その大部分は傳聞であつて史料的价值は低いが、そのうちチュグチャク（この寫本では Čuvačak, Čučak と綴られる）における事件の説明は、著者が直接目撃した事柄であるだけに重要である。語源探究の癖を持つらしい著者が記しているトゥンガンのエチモロジに關する説は一考に値すると思われるので以下に紹介しておこう。

一人の信賴すべき人に、「トゥンガーニーという名は何故にあなた方の名となつたのか」と私が尋ねたところ、答えて「我々の民族を中國人はファイイと呼んでいるが、これは古い中國語で元の狀態に戻つたということである。この言葉をトルコ人たちが翻譯してトゥンガーニーと言つたのが廣く用いられるようになり、後には我々の民族自身もこの名を以て呼ぶようになり、廣く通用するようになった」と言つた。しかしこのファイイ（という言葉の意味は今日では中國人は一人として知らない。ファイイとはどういう意味かと尋ねると、彼らは直ちにファイイはトゥンガーニーのことだと答える。（六五a）

この作品の最後には、ドゥルブルジン即ち現在の額敏からガール・カサバス（ルクチュン周邊）までの著者の行程が、經過したすべての驛亭・哨所とその間の距離によって示されている。その中には地圖上には見えぬ多くの地名が含まれており、地理資料としても興味深い。

VII *Tarīb-i siğarī* (小史) BL., Or 8156. 著者(述) 'Abd Allāh Pānsad. 著作年、一二九一年 muḥarrām 月一五日（一八七四年三月四日）。一〇七葉。

題名の *sigar* は *sigar* もしくは *sugra* の誤りである。著者はヤークーブ・ベグに信頼された部將であり、このペルシヤ語の作品は著者自身の軍事行動の記録とも言ふべきものである。著者の言によると、彼は一二八七年（一八七〇—七一年）頃、四三歳の時に眼を病んで視力を失ったという。それ故この作品を彼自身が自らの手で書いたとは考えられず、フレッチャー氏は、この作品は「誤ってアブド・アッラー・パーンサドに歸せられている」と述べている。<sup>59</sup>しかしながら、この作品を最初に紹介したフォーサイス使節團の團員ベリユーは、「カーシュガル滞在中、私はヤークーブ・ベグ・アタリク・ガーズイーによるこの國の征服に關する一寫本を入手した。これは彼の將軍アブド・アッラー・アミール・ラシュカルにより私の爲に書かれたもので、彼は自らが語っている諸事件において主役の一人であつた」と述べている。<sup>60</sup>ベリユーが、カーシュガル滞在中にアブド・アッラーと面識があつたことは、この作品中の興味深い一エピソードからも知られる。

（フォーサイス使節團は、カーシュガルの）イエング・シャフルの要塞近くの使節館に到着し、七人のサーヒブは使節館に下馬した。（彼らは）二時間の後使節館から出立し、陛下に面會しその手に接吻した。饗宴の後陛下の御前から立って使節館に落着いた。五日後陛下はアフラール・ハーン・トゥラに、アブド・アッラー・パーンサドを連れて行つてドクトル・サーヒブに見せよと命令された。アフラール・ハーン・トゥラは陛下の御前を立ち、使節館に至つて陛下の命令をドルトル・サーヒブに繰返した。アブド・アッラー・パーンサドを迎えに人を遣り、自らはイエング・シャフルに戻つた。アブド・アッラー・パーンサドはこの知らせを聞くや直ちに騎馬し、使節館に到着してミールザー・ヤークーブと共にドクトル・サーヒブの前に出た。ドクトル・サーヒブは家から出て、アブド・アッラーを見、彼の眼（「まぶた」）をひっくり返してあらゆる方向から眼を診て、「インシャッラー、神は全能なり」と言い、アブド・アッラー・パーンサドの首に（二語不明）藥品をつけた。アブド・アッラー・パーンサドは毎日出かけて、

特別の治療（として）毎日十粒の薬を飲んだ。（二〇一b—二〇一a）

右の引用中のドクトル・サーヒブは即ちフォーサイス使節團の醫師ベリユーのことに外ならない。彼はアブド・アッラーが盲いていたことを承知していたのである。<sup>59</sup> そのベリユーが、この作品をアブド・アッラーによって書かれたものとして稱しているのは、奇妙といえは甚だ奇妙なことではあるが、逆に言えば彼は書かれたと斷言するに足る何らかの根拠を持っていたとも考えられるのである。或いはアブド・アッラー自身によって口述されたと考えるのが妥當ではなからうか。

ところでこの作品は先ずベリユー自身によって利用された。フォーサイス使節團の報告書の第三章をなす彼のカシユガリア史の同時代史の部分は、この作品の第五六葉表までのかなりルースな翻譯である。<sup>60</sup> 又その後バルトリドはロンドンにおいてこの寫本を調査し、作品冒頭のホーカンド・ハーン國の建國傳説を紹介している。<sup>61</sup> 筆者も亦ムハンマド・アラームの『ホタン史』に注を付けるに際して、この作品を利用し一部を譯出している。<sup>62</sup> それ故ここでは具體的な記述の内容には立ち入らないが、この作品の史料としての性格について一言しておきたい。

アブド・アッラーはヤークープ・ベグに同行してカーシュガルに入って以來、一貫してヤークープ・ベグ麾下の第一線の司令官であった。彼の作品は、いわばヤークープ・ベグの陣營の側から見た事件の記録であって、東トルキスタンの元來の住民である他の著者たちの作品と異なる點である。權力の中樞に近い人物の手になる故に、その史料的价值は高く他の史料には無い情報も多いが、同時に事件の當事者の手になるが故の偏向も免れ難く存在する。アブド・アッラーは、自身もしくはヤークープ・ベグにとり不名譽な事件には沈黙するか、甚しい場合には詐りを述べることも辭さない。その一例がホタン遠征に關する記述である。ヤークープ・ベグがホタンの支配者ハビープ・アッラーを騙し撃ちしてホタンを征服したことは、ホタンでこの事件を目撃したムハンマド・アラーム始め、他の史料が一致して主張するところであるがアブド・アッラーは、ヤークープ・ベグには平和的な訪問の意圖しかなく攻撃を受けて止むなく反撃したと述べている。<sup>63</sup>



だがこうした黨派性はこの作品の價值を減ずるものとのみは言い難い。他の史料との比較により、著者の祕匿したものを明らかにし得るならば、彼における祕匿の意味をも知ることが出来るからである。いずれにしても、この作品がヤークーブ・ベグの東トルキスタン征服について最重要の史料であることは疑いない。

VIII *Tarīḥ-i amīniyya* (平安の歴史) BN, Collection Pelliot 《B》 1740° 著者 Mulla Musā bin Mulla Ṭisā Hyāca

Sayrāmī° 著作年、一三二一年 šavvāl 月一日（一九〇三年二月三一日）。書寫年、一三二五年（一九〇七—〇八）。二〇八葉。出版、N. N. Pantusov (ed.) カザン、一九〇五年。

右のビブリオテク・ナシイオナルの寫本について、これをパリに齎したペリオは「カシュガリアの歴史。トルコ語。シナ・トルキスタンのバイの現地人である著者の寫本からコピーされた寫本」と注している、これのみからでは、果してこの寫本が著者の自筆か否か判斷出来ないが、コピストの名が無い點も考慮に入れると自筆とする Hoffman 氏の説にも根據が無くはない。少くとも著者の周邊で筆寫されたものであるとは言えよう。因にレニングラードに存在する寫本は一三二八年にコムル出身のムッラー・ムハンマド・ティームールなる人物によって書寫されたものである。パーントゥソフによるエディションとパリ寫本を比較すると、後者は前者の一種の増補改訂版であることが明らかになる。兩者の間の相違は概ね若干の語句の異同であって、前者の言葉足らずでやや理解し難い個所が、後者では適切な語句を補われている例が多い。但し文意に變化が生じている個所も存在する。一例を上げると、著者が著作を行なった理由を述べるくだりは、パーントゥソフ本では、

この著作の動機、原因となつたのはダードハーフ・ムハンマド・アミーン・バーイ・アクサカルである。今一つ（の原因）はこの時にあつて、このモグーリスターンの國が、（この）地域における内訌、敵意、分裂から（脱し

て) 平穩と安全のうちに安定し確立したことである。この二つの關係から私はこの歴史書に『ターリーヒ・アムニヤ』と名付けた。一つの序と二つの篇と一つの結尾を以て完成に至らしめた。(六頁)

とあるが、パリ寫本ではムハンマド・アミーン・バーイの名が消えて、代りに、

この著作の動機、原因となったことの第一は、親しき友人たちと親愛なる兄弟たちの心が、欲望と貪りから脱して平安となり、疑惑と困惑を免れて平穩になったことである。その第二は……(以下は同文)。(三b)

となっている。パーントゥソフ本では『ターリーヒ・アムニヤ』は「平安の歴史」であると同時に「アミーンに捧げられた歴史」をも意味していたのであるが、パリ寫本では後の方の含意は消えていることになる。<sup>(66)</sup>前述のムフリソフ氏によると、著者は一九一一年にこの作品に更に改訂を加え、タイトルも『ターリーヒ・ヒュメイディーヤ』と改めたとい<sup>(67)</sup>う。その寫本は一九五五年と一九五七年にアクスーとカーシュガルで發見された。ところで「ヒュメイディーヤ」と言うのはムフリソフ氏による誤讀であつて、正しくは『ターリーヒ・ハミディーヤ』である。この命名の理由を著者は以下のように説明しているという。包爾漢即ちブルハン・シャヒディ氏の引用を重譯しよう。

この書を『ハミードの歴史』(海迷迪歴史)と稱するには幾つかの原因がある。その一つはオスマン帝國皇帝にして全世界のムスリムのハリーファ、アブド・アル・ハミード・スルターンの息、アブド・アル・ハミード・ハーン二世スルターンが、モグーリスターンの領土と人民が彼に服従和屬していることを宣布したことである。この事實を人民が忘却し得ぬよう又世界の歴史上に顯示するよう『ターリーヒ・ハミディーヤ』と稱した。<sup>(68)</sup>

右の一文は、アブデュルハミト二世の汎イスラーム主義が東トルキスタンにおいても何がしかの反響を産み出したことを實證するものとして興味深い。しかし、一旦は清朝再征服後の「平安」を祝いだ著者が、何故に自らの作品にアブデュルハミトの名を冠したのであるうか。著者の眞意は測り難いが、彼の自らの名聲に對する願望はこうした命名のやり方を

理解する糸口になるかも知れない。

能力の主たる貴き友人たち、尊敬の主、具眼の士たる兄弟たちの輝ける精神にヴェールの掛ること勿れ。(この世に) 生命を借りている期間はまだ終りに至らざるに、知らずしてうかうかと、(他者からの) 無視とともに過し來てわが齡は七十に至った。滅びの境に至った。この愚かなる無視されたる某の善事と美名が世界の表てと人々の口に徴しと記憶を残さぬことに對し、後悔の溜息をつきつつ、わが言葉を上述のように發した時、憂愁に満ちた心に一つの四行詩が浮かんた。心眼を凝らせて算えてみると、突如神意によって、「名聲」という言葉がこの小歴史書の完成(の年代)にクロノグラムとなる(ことがわかった)。

#### 四行詩

わが命終りに近づけど「名聲」は出でず。

我、不正無視のうちに過したり。「名聲」あれかし。

善事を望みて、歴史書・記録を書きたり。

著作の年を問われなば、汝答えよ「名聲」と。(二〇五b—二〇六a)

以上は「名聲」 *yalpsi at* というクロノグラム(二三二)を引き出す爲の作り事であるかも知れない。しかし、無視を恐れ名聲を望むことが著者の眞意であつたならば、清朝支配の「平安」を祝ぐことも、アブデュルハミトの名を自らの作品に冠することも、彼にとっては「名聲」を世に遺す方便ではなかったか。

パーントゥソフの刊本が存在することもあって、この作品は幾人もの専門家によって利用、紹介されており、その内容の大凡はすでに學界に知られている。又作品から知り得る限りでの著者の経歴もユーディン氏によって纏めて紹介されている。<sup>(88)</sup>それ故ここでは、この作品の史料價值を明らかにする爲にも、著者ムッラー・ムーサーのいわば歴史家としての精

神と方法の問題のみを取上げたい。

著者は優れて合理的な精神の持ち主であった。その著作の方法について、彼自身以下の如くに言っている。

私は、(歴史の) 始めの部分は信頼すべき歴史書、有用の書物から内容を探り、後の部分は、見た人々と知っている人々に尋ねて、伝えられた別々の物語、バラバラの事件を繋ぎ合わせ、要約して記述の糸と敘述の紙片の上に固定した。(二b)

事實著者が様々の人々から情報を収集していたことは他の個所の記述からも知られる。

アクスー人、ムガンニー・アフマド・アホーン・イブン・ムッラー・ルスタムという人物が居た。彼はガーズイー陛下に騎兵及び近従として、平時も遠征時も、又ウルムチ・トゥルファーン戦役に際しても七年の間仕えており、情報と事件について確かであった。私はこの人物に直接面談してウルムチ・トゥルファーンに關する情報を尋ね、又他の信頼すべき人々にも確認して、これらの紙片の表てに記録した。何故ならば、一人の人間にとり、あらゆる場所に居合せて目撃者となり情報を知ることが不可能であることは、誰の知性・理性にも明らかなことであるからである。

(一八三b)

かくして著者は東トルキスタンの外、中國内地の事情についても情報を得ており、「キリスト教徒インギリス」人たちが清朝に勝利して、「ビルマという地方と七二の都市」を占領したこと、「長い髪のチャンモーズ(長毛子)」が反亂を起したこと、又マー・ファー・ルン即ち馬化澹を頭とするトゥンガンが金積堡に籠って清朝に反抗したことなどを傳えている。更に著者は、史料批判の術をも心得ていた。東トルキスタンのマザールに關連して彼は以下の如くに言っている。

この七城(イエテ・シャフル)の地には、恵み深く高貴なるシャイフたち(の墓)と氣高く利益あるマザールが多くある。しかしその大多數の名と父稱及びタズキラは知られていない。又假りにタズキラが存在する場合でも、多く

のタズキラは信賴すべき歴史書に一致しない。何時か何人かが、歴史書を見ることがなく、勝手にタズキラを書き置いたものに相違ない。そして後の人々はこれに満足し、(マザールは)この(デッチ上げられた)名を以って有名になったのである。(一九六a—b)

かく言う著者は當然若干の「信賴すべき歴史書」を讀んでいた。作品中には、ジャーミーの『ナファハート・アル・ونس』、ミールホンドの『ラウザト・アッ・サファー』、ムハンマド・ハイダルの『タリーヒ・ラシーディー』、アッラーヤール・スーフイーの『スバート・アル・アジーズィーン』、ムッラー・ニヤーズ・ムハンマドの『タリーヒ・シャールヒー』の名が挙げられている。

かくの如く著者は同時代の年代記作者たちの中でも優れて學識のある知性的な人物であつたが、彼の合理的精神にも自らなる限界があつた。例えば、彼にとっては「信賴すべき書」のすべての記述は、彼自身の目撃と同じぐらい疑う餘地の無い眞實であつた。

ヤークープ・ベグ軍とホタン・オアシスの住民との戦鬪の記事に續けて言う。

歴史の書物に以下のことが述べられている。千人が死ねば、うち一人の死體は腕を上を擧げる。二人が死ねば、二人の死體が腕を擧げる。一萬人が死ねば、うち一人の死體は立ったままである、と言われている。このホタンでは四人の死體が腕を擧げていた。このことから四千人が滅亡に至つたらしいことが知られる。(二〇九a—b)

しかし、こうした限界にも拘らず、この作品が十九世紀ウイグル歴史文獻中の白眉であり、最も基本的な史料であることは疑う餘地がない。

IX [Tarih-i Holan] (ホタン史) IF, Ms., 3348-8. 著者、ムハンマド・アールム。著作年、一三二一年 sa'ban 月

一八日（一八九四年二月一七日）。出版、Hamada (ed.), *Zinbun*, vols 15, 16, 18°.

『ホタン史』というのは、この作品をローマ字轉寫して出版した際筆者が假りにつけた題で、寫本自體の表紙には『ハ  
ーッジー・パーディシャー・ハビーブ・アッラーとラーシディーン・ハーン・ガーズイーとヤークーブ・ベグの傳記。  
ホタンの町で書かれ、シャーバーン月に完成した』と記されている。レニングラードにも一寫本が存在し、バルトリド以  
來ソ連の専門家によって『カシュガル史』と呼ばれているが、この寫本はパリ寫本から直接コピーされたものであると考  
えられる。詳しくは筆者による解説と譯注を参照されたい。

X *Gazat-i muslimin* (ムスリムの聖戰)。著者不明。出版、Ross, E. D., *Three Turki Manuscripts from Kashghar*,  
Lahore, 1908 (?)。

この作品については、ロスによる刊本が知られるのみで、彼が底本にした寫本も現在のところその所在は不明である。  
導入部を除いた前半部（元の寫本で第二〇二葉まで）には羽田明教授による翻譯がある。<sup>69</sup> ロスのエディションは極めて出  
來が悪く、ウィグル語を全く解さぬ人物によってリトグラフが製作されたのではないかと思える程のデタラメな誤りが往  
々にしてある。内容について見ると、抑々この作品が唯一人の著者の手に成るものかどうか疑わしい。即ち元の寫本の第  
一九九葉裏までとそれ以後の部分には、内容と文體に顯著な違いが存在する。羽田教授の譯によっても明らかなように、前  
半部は修辭に富んだ文章でラーシディーンとその家系を讀んでいるが、後半は文章も極めて素朴で前半に多出するコーラ  
ンとハディースからの引用は全く現れない。又前半部ではラーシディーンは多くの敬稱・美稱とともに、ハーン・ホージ  
ヤム陛下と呼ばれているが、後半では單にラーシディン・ハーンとのみ呼ばれている等の相違がある。こうした點から、  
筆者はこの作品が少くとも元來は二つの別の作品を繋ぎ合わせたものではないかと推察する。ラーシディーンの祕教的な

靈力を稱揚している等の顯著な宗教的色彩からして、前半の著者は、先のコールラーのダーウド同様のスーフィーではなかったかと推察される。

後半では、ヤークーブ・ベグの東トルキスタン征服から清朝の再征服までが述べられているが他の史料に比して特に見るべき点はない。ただ、ヤークーブ・ベグのロンドンとイスタンブルへの遣使とフォーサイス使節團の來訪に關する記事は、興味深いエピソードである。イスタンブル遣使の件りを紹介しよう。

さてそれから、これらのサーヒブたち（フォーサイス使節團のこと）の助力により、ヒンドスタンに道を借りて、イスタンブルの皇帝、ルームのハリーフア、アブド・アル・アジーズの許へ、又かのカーズイー・トゥラムを贈物とともに遣した。ヤールカンドを出てイスタンブルに着くまで英國のサーヒブたちが助力した。カーズイー・トゥラムはイスタンブルに至り、一ヶ月間指定された場所に住み、それから大宰相たちと會見した。數日後贈物と上奏文を差し出した。又自らもスルターン・アブド・アル・アジーズ・ハーンの御前に出た。（ヤークーブ・ベグが）送った請願書をもハーンの御眼にかけた。（スルターンは）請願書を読み嘉納して、カーズイー・トゥラムに五分間の謁見を與えた。一萬二千の元込め銃と三十の元込め砲と軍事教練を行なう爲の六人の教官を恩賜した。（カーズイー・トゥラムが）外に出ると大宰相たちは協議して、スルターン様のこの恩賜は法令にそぐわない。一萬二千の銃を他國に與えた例は無い、と言って四千の銃と砲と教官を與えた。（四八一四九頁）

現在アンカラの「トルコ歴史學協會」には、ヤークーブ・ベグがアブデュルアジズに宛てた、この軍事援助に對する返禮の手紙が保存されている。その手紙によると、軍事援助の内容は、砲六門、舊式銃千丁、新式銃二百丁、軍事教官四名であつた。因に彼ら軍事教官は進撃して來た劉錦棠麾下の清軍に捕えられたが、清朝側では彼らの祖國「乳目國」が、一體どの國のことか理解出來なかつた。言うまでもなく乳目はルーム、即ちオスマン帝國のことである。

XI *Šarh-i šikasta-nama* (敗殘の書注解)。著者 Sayyid Muhammad Kāfi。著作年 一二九九年 cumādī al-avval

月二日 (一八八二年三月二二日)。出版 Pantusov, N. N., *Obrazy tarančinskoj narodnoj literatury*, Kazan, 1909。

この作品の現在知られている唯一の寫本はレニングラードの「東洋學研究所」に所藏されるが、筆者が目睹し得たのは右のパーントゥソフによるエディションのみである。レニングラード寫本とパーントゥソフ本は完全には同一のものではなく、前者は六章より成るが後者は五章で、そのうち第一、四、五章がムムハンマス體、第二章がカスィーダ體、第三章がマスナヴィー體の韻文である。著者はイリのタランチで、作品中に「わが齡六十歳を越えぬ。今や喜ばしきことなし」とあるに従えば、その生年は一八二〇年頃であらう。

この作品が主として傳えるところは、一八八二年二月のイリ地方の清朝への返還に先立って生じたタランチのロシア領への移住事件である。所謂イリ危機を收拾するため、一八八一年二月二四日に調印されたセント・ペテルスブルグ條約はその第三條において、イリの居民即ちタランチに對し原處に留つて中國人となるか、ロシア領に移つてロシア籍に入るかを選択する自由を認めていた。その結果多くのタランチがロシア領に移住し、彼らが今日ソ連に居住するウイグル人の最大の起源となつたのである。この作品の著者サイイド・ムハンマドが歌うのは、露清兩帝國の狹間にあつて故郷を捨てざるを得なかつたタランチの心情である。先ず冒頭、かつての清朝の支配を回憶して言う。

聽け兄弟たちよ。今や世の終りの時たり。

誠實を求むる勿れ。時は日々に悪しく成り行けるなれば。

わが頭上に運命下り、平安は失われたり。

イリの町をば無知なる不信者ども占領したりたり。

その結果は如何なるか、汝ら測りても見よ。



古えよりこのイリを中國可汗しろしめしたり。

かつての汗は正義の門を開き、

壓制なく恩寵施したり。

しかれば貧富の民、等しく平安に過したりき。

しかれども今やその如くにてはなし。

後のジャンジュン（イリ將軍）、アンバンは律を破りて我儘をなせり。

民草を苦しめ正義を打ち捨てぬ。

我らムスリムに、中國人多くの壓制を加えたり。

人々餘儀なく故郷を離れ僱人となりぬ。

何人も己が家にて安らかなることを得ざりき。

これらの有様大汗に達せざるなり。

中國可汗の許に赴かんに人々力無かりき。

この地にてジャンジュン、アンバンに訴え出ずれば、

彼ら怒りて打ちすえ牢に投じぬ。

この命如何に苦しき日々を経しことぞ。

身に破れ衣、足に長靴、

穴あき古びたる衣は體を被う能わず。

錢を得んにも家に賣るべき物とてなし。

茫然として頭垂れて座し居たり。

かかるよりは絞首臺に死ぬこと易からんとぞ思いける。(第一章第一―五節)

ついで著者は、清朝に對する反亂が成功したことを簡單に述べた後、一八七一年のロシア軍のイリ占領後の情景を歌う。

「大いなる正義もて治めたり」とは言うものの、異教徒の支配が人心の荒廢を齎したことを著者は看過していない。

神の攝理によりかのウルース(ロシア)われらが敵となりたり。

勇士ども出馬したれども戦わずして眺めいたり。

首領たちは餘儀もなく、皆心より(ロシアの)民となりたり。

(ロシアは)この國を手中にし、大いなる正義もて治めたり。

一家に三テングを課したるも、今や(人々)悲しみより放たれたり。(第一章第九節)

軍士よ人民を壓迫する勿れとすべての村に布告せり。

(しかし)惡人ばら頭をもたげ、善き人を眼にもとめず。

父の命を息子聽かず。夫の言に妻従わず。

尊敬を投げ捨て、人々己が心のままに振舞いぬ。

われらのこの行ないより、日々百千の惡行生じぬ。

モスクは空しく、禮拜に參衆なし。

われらが手より善行去り、神への畏れ愼しみなし。

貧者には誠實、富者には寛容なし。

孤兒に對する愛憫なく、賢者に對する服従なし。

預言者のことば、今やいちいち明らかになりぬ。(第一章第一〇—一二節)

そして終にセント・ペテルスブルグ條約が締結される。その情報は先ず噂さとしてタランチの間に廣がった。

中國に我らを返すという噂さ流れたり。

中國の手中に留るまじと村々言い合えり。

かの時諸人の頭上に混亂生じ、涙流したり。

これを知りて長たち言えり、これは斷じて嘘言なりと。

心靜かにその業を爲せ。今は平安の世なればと。

しかれどもこの噂さ終に眞實となりぬ。嘘にてはなし。

偉大なる二人の皇帝和解したり。

われらを除き、この水土を中國に歸せしむることとなりたり。

(留るや去るや)われらに選ばしむることとなりたり。

今やこのこと人々のうちにて明らかに語られたり。

かの偉大なる將軍、すべての村に命じぬ。「中國皇帝にイリの町をば返したり。

移る移らぬは人民の望みにまかせたり。

神、イリの砂と草をば中國の汗に與え賜えり。」

われらが頭上にこの災い下りたり。嗚呼助け給え。

「すべての村より、まず三人宛チリクの地へ移れ。

移り行きて運びたる財産を監視すべし。

又大麥、小麥、飲食の資を運べ。

(残りたる) 汝ら明春チリクの地に移れ。」

かく命じて將軍戻りたり。今や疑いもなき事實なり。(第一章第一八一―二二節)

右の引用に見えるように、ロシア人が移住の具體的な方法をも提示していたのが事實ならば、彼らタランチが自由な意志に基づいて移住を選択し得たか否かは問題の残るところである。タランチの移住先チリクの地は、著者によると家も水路もない原野であつた。著者は來るべき原野での苛酷な生活と捨て去って行くイリの繁榮とを比較しつつ、神とロシア皇帝に援助を求める。

中國の汗その正義においてこの汗(ロシア皇帝)に及ばず。

彼常に貧しき者を憐みたもう。

この國を平安にしるしめたもう。アヌーシルヴァーンのごと。  
この故にわれらすべてイリを捨て行かん。

今や戻らんに力なし、そも何處へ？（第一章第三節）

以上は第一章全三六節からの抄譯であるが、ついで第二章ではまだ見ぬチリクでの生活への不安が、第三章ではイリの町への別離の挨拶が歌われる。第四章では『現世の常なきことの物語』と題して、前半では現世の頼むべからざることを言い、後半ではイリに復歸してくる清朝の支配に對する恐怖を述べる。

大汗われらが罪を赦したまえり。

偉大なる陛下より敕書至れり。

さりながら來たる兵ども信ずるあたわず。われらその時を恐れたり。

彼らわれらに害を爲すとも、汗にわれらの嘆き届かず。

かほど苦しき日々は絶えてなからん。如何なる隠れ家もなし。

口外に出ずれば、ジャンジュン自ら汗となり、

再び小回子に害を爲し我儘を爲すべし。

税を課し、年貢重かるべし。

このジャンジュンの兵ども來たりたり。彼ら不正を爲すならん。

これに用心するより外に術なし。

イリの町に來たれる大老爺、汗の律をば破りたり。

口外に出ずるや（汗の）律を踏みはずしたり。

常々賄賂を喰いて、その倉を錢にて満たしたり。

ベグども彼をうやまいて、彼に服従したりたり。

これを知りたる人々にとりて、(この地に)留まること正しからず。(第四章第一五—一七節)

しかし著者自身はロシア領へ移住することなくイリに留まったらしい。

立ち離らんにもわれに力なく、ひたすらに忍ばん。

われら中國を恐れずんば誰か荒野に趣かん。

おお神よ、異教徒のうちにてわれらを卑めたもう勿れ。

創造主よ、神よ、この望みを受け入れ給え。

かく祈りつつ、今日われ悲しみに沈みたり。(第五章第一九節)

このタランチの悲劇は今から丁度百年前の事件である。しかし今日もなおウイグル人が中國とソ連という二つの強大な力の狭間の存在であることに變化はない。

**XII** *Kitāb-i šaṣat dar mulk-i čīn* (中國における聖戰)。著者、Mulla Biāl。著作年、一二九三年(一八七六年)。出

版、Pantusov, N. N., *Bojna musul'man protiv kirajcev*, 2 vols, Kazan, 1880-1881。

この作品と著者については、かつて筆者も紹介を行なったことがある。<sup>(20)</sup>訂正すべき若干の點もあるが今は舊稿を参照されたい。

**XIII** *Ya'qub Beg va fatr taḡanining bayani* (ヤークープ・ベグの死去の物語)。著者不明。出版、Grenard, F., (ed.)

Spécimens de la littérature moderne du Turkestan chinois, JA, 9<sup>e</sup> série, t. XIII, 1899.

グルナールにより佛譯をつけて出版されたこの作品は、彼がロシアのカシユガル領事、ペトロフスキーから入手した一五ページからなる寫本の一部であるという。但し「フランス學士院」のグルナール・コレクションにはこの寫本は含まれていない。グルナールの言に據れば、著者はヤークープ・ベグの息子ハック・クリ・ベグの信用厚い従者であつたという。

グルナールによって刊行されているのはもとの寫本の極一部で、ヤークープ・ベグの死の事情を伝える件りのみであるが、史料としてかなり重要な説を含んでいる。というのは著者はヤークープ・ベグの死の翌日、それと知らぬハック・クリ・ベグによって彼の父の許に遣わされているからであり、著者のそこでの見聞の記録であるこの作品は、自殺、事故死、毒殺、卒中など諸説紛々としているヤークープ・ベグの死因について極めて有力な證言となるからである。著者の傳えるところでは、ヤークープ・ベグの死因は卒中である可能性が強い。この作品は、ヤークープ・ベグの宮廷の情景を傳えている點でもやや興味を引く。

以上一三點が現在までに筆者が目睹し得た十九世紀後半のウイグル歴史文獻のすべて（但しうち一點はペルシャ語）である。これは現在その存在が知られている寫本の半ば餘りにしか過ぎない。しかし、作品とその著者たちの多様性の一端を紹介し、これらの作品が「史實に於ては正確を缺く恐れあるも、而も當時人心の情偽に觸るる所あること」（内藤湖南『秦邊記略の嘎爾旦傳』）は示し得たかと思う。もしその上に東トルキスタン文化史の解明に聊かなりとも寄與するところがあるとすれば筆者の望外の喜びである。

註

- (1) この時期に關する專論としては、早くも西田保『左宗棠と新疆問題』(東京博文館、昭和十七年)があるが、これは主として Boulger, D., *The Life of Yakoob Bek*, London, 1878 と王安定『湘軍記』を纏めたものである。概説の一部には、羽田明『清朝の東トルキスタン統治政策』(『中央アジア史研究』臨川書店、一九八二)及び佐口透『十九世紀中央アジア社會の變容』(『岩波講座・世界歴史・二二卷』岩波書店、一九七二)がある。
- (2) Hsu, I. C. Y., *The Ili Crisis*, Oxford, 1965; Mohammad Anwar Khan, *England, Russia and Central Asia*, Peshawar, 1963; Liu Kwang-Ching & Smith, R. J., *The military challenge: the north-west and the coast*, in *The Cambridge History of China*, vol. 10, part 2, Cambridge, 1980 等がこの傾向をよそへてゐる。
- (3) 中國における最近の研究としては、包爾漢『再論阿古柏政權』(『歷史研究』一九七九一八)。紀大椿『試論一八六四年新疆農民起義』(『民族研究』一九七九一二)。同『阿古柏對新疆的入侵及其復滅』(『歷史研究』一九七九一二)。新疆社會科學院民族研究所『新疆簡史・第二冊』新疆人民出版社、一九八〇等がある。
- (4) 最近の連の研究には、Hodžev, A., *Cinskaia imperija Džungarija i Vostočnyj Turkestan*, Moskva, 1979; Isiev, A. D., *Ujurskoe gosudarstvo Jettisar*, Moskva, 1981 及び *Materialy po istorii i kul'ture ujurskogo naroda*, Alma-Ata, 1978 所收(論文 Isiev, D., *Nacalo nacionalno-osvoboditel'nogo vostanija ujurov vo vtoroj polovine XIX v. (1864-1866 gg.)*; Baranova, Ju. G., *Svedenija ujurskoj hroniki «Tarih-i amnija» o vostanovlenii cinskogo gospodstva v Sin'czjane v 1875-1878 gg.* がある。
- (5) Hamada, M., *Islamic Saints and their Mausoleums*, in *Acta Asiatica*, 34, 1978, p. 89, note 46.
- (6) この表現は『タリーヒ・アムニヤ』はるる多くの史料で常用された。
- (7) Fletcher, J., *China Inner Asia c. 1800*, in *The Cambridge History of China*, vol. 10, part 1, p. 69.
- (8) *Narody Srednej Azii i Kazachstana*, II, Moskva 1963, p. 489; Pritsak, O., *Des Neunigursche*, in *PIUFT*, I, p. 525
- (9) 佐口透『東トルキスタンと清朝』(『岩波講座・世界歴史・一三卷』一三〇頁。
- (10) 佐口透『トルキスタンの諸ハン國』(『岩波講座・世界歴史・一三卷』六三一六四頁。
- (11) Köprülü, M. F., *Çagatay edebiyatı*, in *IA*, vol. 3.
- (12) *ibid.*, p. 318.
- (13) Kajdarov, A. T., *Razvitie sovremennogo ujurskogo literaturnogo jazyka*, Alma-Ata, 1969, p. 30.
- (14) カイダローフ氏は、現代の寫書ウイグル語は「一九二〇—三〇年代に古典時代の文語の基礎の上ではなく、一般民衆の生きた國語の上に形成された」と言っている。Kajdarov, *ibid.*, p. 55.
- (15) 筆者はすでに一例をあげておいた。Hamada, M., *L'histoire de Holan de Muhammad Aïam (I)*, in *Zinbun* 15, pp. 4-5.
- (16) Muginov, M. G., *Opisanie ujurskikh rukopisej Instituta Narodov Azii*, Moskva, 1962, p. 3.
- (17) 彼は文革中に連に亡命した。Sovetskaja Tjurkologija の「デューワーン・ルガト・アル・テュルク」の記念特集號(一九七二)に短文を寄せて「マオイスト」により、このカシュガリーの著作の現代ウイグル語譯の出版が妨害されたと述べている。因にこのウイグル語譯は最近ウルムチから出版されたが、編譯者のリストにはムフリン氏の名は無。
- (18) Judin, V. P., *Jaspek Muhişov. Ujgur klasik edibiyyati qol-yazmirlari katalogi*, 1, 1957 in *Trudy Instituta Istorii, Arheologii i Etnografii Akademii Nauk Kazahskoj SSR*, vol. 15, 1962, p. 198.



- (19) Kajdarov, op. cit., pp. 44-45.
- (20) 程瀚洛「中外有關維吉爾族史的研究」(『民族研究』一九八二)一、四三頁。
- (21) Kajdarov, op. cit., p. 44.
- (22) *Sobranie vostochnykh rukopisej Akademii Nauk uzbekskoj SSR*, I-X, Tashkent, 1954-1975.
- (23) Hartmann, M., Die osttürkischen Handschriften der Sammlung Hartmann, in *MSOS*, Jhrg. 7, Abt. 2.
- (24) Raquett, G., Collection of manuscripts from Eastern turkestan. An account of the contents, in G. G. *Mannerheim, Across Asia from West to East in 1906-1908*, (rep.) Oosterhout N. B., 1969.
- (25) ハーヴェード大學のプリンス・アーク教授が來日された際、同「たてしむ」コーナーで「一本本が存在するもの」について話した。
- (26) Šah-Mahmud ibn Mirza Fazl Īrās, *Hyronika*, ed. O. F. Akimusiĭkin, Moskva, 1976.
- (27) Muginov, op. cit., p. 45.
- (28) 所謂『タズキラ・イ・ホーシャガン』の本當のタイトルは『タズキラ・アル・シャーン』もしくは『タズキラ・イ・シャーン』であることが筆者の調べによつて、Hamada, *Islamic Saints*, p. 90, note 48, によつて。
- (29) Muginov, op. cit., pp. 23-24; Dmiĭeva, L. V., A. M. Muginov, S. N. Muratov, *Opisanie tjurkistich rukopisej Instituta Narodov Azii, I, Istorija*, Moskva, 1965, pp. 137-139.
- (30) Temir, A., Ein osttürkisches Dokument von 1722-1741 aus Turfan, in *UAF*, XXX, 1961.
- (31) Hofman, H. F., Turkish Literature, A Bio-bibliographical Survey, Section III, Part I, 6 vols, Utrecht, 1969.
- (32) Fletcher, J., The heyday of the Ch'ing order in Mongolia, Sinkiang and Tibet, in *The Cambridge History of China*, vol. 10,
- (33) part 1, p. 393; Tihonov, D., Vostanie 1864 g. v vostoĭnom Turkestanе, in *Sovetskoe Vostokovedenie*, V, 1948, p. 167.
- (34) 一七二二一七二三の兩年アフガン・パシールのキルギズ族の調査を行つたベッ・ドル氏は、第二次大戦中に「オイ・タク」地方からアフガン・パシールに移動したキルギズ・ナイマン部の存在を指摘している Remy Dor, *Contribution à l'étude des Kirghiz du Pamir Afghan*, Paris, 1975。この地圖には「オイ・タグ・アグズ」即ちオイ・タグロという村名が記されているが、これは明らかに最近藤木高嶺氏が滞在されたパシールのキルギズ族住地への入り口にあたっている(藤木高嶺「秘境のキルギズ」朝日新聞社、一九八二)。オイ・タグというのはパシール——谷——谷の谷の一部を指す地名ではなからうからう。
- (35) Bellow, H. W., History of Kasughar, in *Report of a Mission to Yarkund in 1873*, Calcutta, 1875, p. 204.
- (36) Isiev, Nacalo, p. 67.
- (37) イッラー・ヨラールによると、トゥンガンのアホーンたちに保護を求められたイリのアブド・ラスル・ベグは、カズ、イリのナースィル・アル・ディーンにその可否を問ひファトヴァーを發するよう求めたところ(『蘭語記』二二一四頁)。
- (38) シマディック・ベグのホーカン・ベグの遣使について、Hamada, M. L'Histoire de Hotan de Muhammad Aĭam (III), in *Zinbun* 18, note 188-21a によつて。
- (39) Hamada, *ibid*, note 188-21. 包爾漢「再論阿古柏政權」七八頁。
- (40) Hamada, *ibid*, note 190-14.
- (41) Hamada, *Islamic Saints* 及びその問題と扱つて。
- (42) Triningham, J. S., *The Sufi Orders in Islam*, Oxford, 1971, p. 203.
- (43) 紀大椿「武論一八六四年新疆農民起義」四四頁。
- (44) 例へばイッラー・ヨラールにおけるナフターニーの影響について、

- 拙稿「ムッラー・ビラルの『聖戦記』について」(『東洋學報』五五一四)を見よ。
- (45) 神祕的戀愛詩に關する概説として、Bombaci, A., *Histoire de la littérature turque*, (tr. I. Melikoff), Paris, 1968 の第四章が手あやしく纏まてゐる。
- (46) *bäg* と *sag* (大) を押韻させた言葉遊びである。
- (47) 著者は通辭の借用形である *tüngci* の *-ci* を人を示す接尾辭 *-ci* と理解した上で、*tüngci*, *säyci*, *qoğuncı* という言葉遊びをしている。
- (48) キョク・バシはミラーブと同義である。オン・バシ(十人長)が二度現れるのは著者の誤りか。
- (49) いま一つの『ザファル・ナーマ』という作品の存在が知られている。カイダーロフ氏に據るとその著者はムッラー・シャーキルで、寫本は一九五五年にハミで發見された。この作品の主題もクーチャー蜂起であるらしいが、もし假りにインディア・オフィスの寫本の著者がムハンマド・アリー・ハーンでなかったとしても、これがムッラー・シャーキルのものである可能性はない。何故ならムッラー・シャーキルの作品は一八六六年にウシシュ・トタルファーンで書かれたとされているからである。Kajdarov, op. cit., p. 51, note 79. *Zafar-nama* bu tıñ cronogramı, 兩者の著作年が一致しないことを示してゐる。
- (50) Hamada, L'histoire de Hotan (III), note 199-24.
- (51) *ibid*, note 192-8a.
- (52) *Report of a Mission*, p. 99.
- (53) Hamada, L'histoire de Hotan (III), notes 188-2, 188-10 et 188-21a.
- (54) この人物については *ibid*, note 192-8 を見よ。
- (55) Katanov, N., Mančurko-Kitaickij "it" na narecii tırkov Kitajskogo Turkestana, *ZVOIROAO*, V. 14, 1901, pp. 31-33.
- (56) 「七人の眠る人」として、Massignon, L., Les sept dormant d'Ephèse (ahl-al-kahf) en islam et en chrétienté, in *R. E. I.*, 1954
- ~1961 et 1963 という大變に詳細な研究があるが、そこではトウのマザールについてに言及があるものの、この作品に關しての言及はない。
- (57) Fletcher, J., *The Cambridge History of China*, vol. 10, part 1, p. 637.
- (58) Bellew, op. cit., pp. 190-191.
- (59) *ibid*.
- (60) 注(55)參照。
- (61) Bartold, V. V., *Očiot o komandirovke v Zapadnuju Evropu, Sočinenija*, t. VIII, pp. 407-408.
- (62) 注(58)參照。
- (63) 『タリーヒ・シイガリー』のホタン征服に關する部分は、筆者に於て譯された。Hamada, L'histoire de Hotan (III), appendice II.
- (64) Pelliot, P., Répertoire des «collection Pelliot A» et «B» du fonds chinois de la Bibliothèque Nationale, *Young Pao*, sér. 2, vol. 14, p. 780.
- (65) リングラード寫本のこの部分はユーティン氏に於て移錄されたものが、それと異なるベリ寫本にも見出される。Materialy no istorii *Kazakhstan hanstı*, XV-XVIII vekov, Alma-Ata, 1969, p. 476.
- (66) Judin, Juspbek Muhisov, p. 200.
- (67) 包爾漢「論阿古柏政權」(『歷史研究』(一九五八一三) 三頁。
- (68) Judin, Materialy, pp. 477-481.
- (69) 羽田明「Ghazāt-i-Muslimin 譯稿——Yāqūb-bäg 反亂の史料」『大陸アジヤ史論集』大陸アジヤ史學會(一九六四)
- (70) 拙稿「ムッラー・ビラルの『聖戦記』について」
- (71) ヤーコーフ・ベクの死因について、Hamada, L'histoire de Hotan (III), note 199-24 參照。